2012年 5月 8日 No. 34

白夜の国々　春夏秋冬

ーニュースレター　第34号　2012年 春ー

（独）日本学術振興会　ストックホルム研究連絡センター
Japan Society for the Promotion of Science – JSPS Stockholm Office

ヴァルプルギスの夜
（ストックホルム・リッダーホルメン島）

目　次

Ⅰ．プロローグ

北欧の国　ストックホルムより（2）

Ⅱ．ニュース

KVA-JSPS セミナー
スウェーデン同窓会ボードメンバーミーティングについて
カロリンスカ医科大学との会合について
慶應義塾大学安井正人教授の来会について
VINNOVA との会合について
日本学術会議若手アカデミー副委員長の来会について
Prof. Görran Hansson ノーベル委員会医学生理学賞事務局長との会談について
大阪大学島田昌一教授の来会について
長崎大学須齋理事の来会について
ストックホルム大学池上教授の来会について
カロリンスカ医科大学金子明教授の来会について
北海道大学川野辺国際本部副本部長の来会について
在スウェーデン日本大使館主催東日本大震災追悼・復興レセプション

Ⅲ．レポート

KVA-JSPS セミナー
　ストックホルム大学での講演

Ⅳ．北欧諸国における学術研究の動向

ストックホルム大学 Wenner-Gren 研究所 Barbara Cannon 教授が
　王立科学アカデミー会長へ
QS 学生都市ランキング
カロリンスカ医科大学内学生交流スペースのリニューアル
スウェーデンからの留学人口の増加と学生の動向について
林崎良英理化学研究所オミックス基盤研究領域長がカロリンスカ医科大学より
　Honorary Doctor of Medicine を受賞
北海道大学ヘルシンキオフィス開所について
2012 年ノーベル賞の発表日程について

Ⅴ．お知らせ

セミナー/シンポジウムの開催

ヘルシンキ大聖堂

本誌は、ストックホルムセンターのホームページ（http://www.jsps-sto.com/）に掲載しています

1．プロローグ

北欧の国　ストックホルムより（2）

藤井　義明

北欧の地、ストックホルムは、暗くて寒い、長い冬が去って、春がやってきました。この春の訪れのうれしさは、この地で冬を過した者のみが味わえるうれしさであると、つくづく思います。日照が日一日と長くなり、太陽が頭上で輝くようになると、すべての植物は芽吹き、動物達は活動的になります。スウェーデンの人々は冬が厳しいだけに、太陽の恵み豊かな自然をこよなく愛する国民であることが分かります。自然享受権(Allemansrätte)は、この事をもっともよく示す制度だと思います。人々は、森や野原や島などに、所有者の許可なく入ることができ、草の実や木の実を摘んだり、キノコ狩りをして楽しむ。もちろん、木を切ったり、森を汚したりすることは禁じられている。この制度はかなり古い歴史を持っているらしく、人々のマナーも良く、森や島の所有者も大変に鷹揚である。冬が厳しいだけに、自然の恵みを多くの人と分かち合う気持ちが強いのであろう。

うれしさは春のひかりを手に掬い　野見山朱鳥

春の陽気に誘われて、街中を散歩したり、あるいは、バスや列車に揺られて郊外に足を伸ばすと、至る所に大きな岩山が現れたり、岩肌をあらわにした崖にでくわします。工事現場では巨大な岩石と格闘している工事夫などを、あちこちで見ると、ストックホルムは、大きな岩盤の上にたてられた街であることを実感させられます。この土地に、道路を通し、鉄道を敷き、運河を掘って街を作ることが如何に困難な作業であったかが、分かります。ストックホルムに生まれ、育ったアルフレッド ノーベルが、ニトログリセリンの爆発力の強さに気付き、これを珪藻土に染み込ませて、破壊力を失わせずに、爆発力をコントロールし、ダイナマイトを発明して、財を成したことが、容易に首肯ける気がします。

現在では、ライターの出現によって、日本では、余り使われなくなったマッチも、スウェーデンで産み出されたものです。新たに発見された赤リンと硫黄などを、それぞれ、発火剤と燃焼剤に分離してわずかな衝撃で火を起こす方法を発明したのは、スウェーデン人のヨハン　ルンドストレームで1855年のことです。このスウェーデン式の安全マッチが、世界の市場を席巻したと言われています。スウェーデン人にとって、大変自慢なようで、今もマッチが土産物として売られているし、私どもの借りている家具付きのアパートでも、マッチ箱が額縁の中に入った飾り物として置かれています。イェンチョーピンには、最初に建てられたマッチ工場の場所に、国営のマッチ博物館があるそうです。この他に、スウェーデンで発明されて世界中に普及したものが多いのに驚きます。例えば、摂氏の温度計の発明で名を残したA.セレシウス、長さの単位のA.オングストロームや、心臓のペースメーカーを作ったR.エルムクウィストとA.セニングなどです。

科学技術の分野でも、私が大学院の最初の講義で教わった、血清タンパク質の分離に用いられて威力を発揮した電気泳動装置を発明したA.チセリウス、ウプサラ大学で、彼の先生であったT.スウェドベリは超遠心機を作製して、タンパク質分子の大きさ、分子量の測定に成功した（沈降速度の単位であるSはSvedbergに由来するものです）。さらに、J.ポラースとP.フローチンは、D-グルコースの鎖状重合体であるデキストランに架橋を加えて支持体を作り、これを用いて分子篩ゲル濾過法を創出した。これらの技術によって、タンパク質や核酸の分離精製法が確立し、近代生命科学の発展の基盤技術として、計り知れない貢献をしている。また、忘れてはならないのは、動植物の分類学の父、カール フォン リンネである。1735 年に“自然の体系Systema naturae”を発刊して、二語名法を創案し、動植物の命名法の基礎を確立した。

このような科学技術上の発明発見が、現在の人口比から推定して、日本の人口の10分のIにも満たないスウェーデンから、生まれたことを考えると、驚くべきことのように思われる。19 世紀のヨーロッパでは、スェーデン人は“他国の発明やアイデアを基にした改善に長けている”との評価があったと言う。確かに、上に述べたような成果は、実用性の改善や方法論の確立に関するものが多いが、新しい方法論の確立により、今まで見えなかったものが、見えてくることはよくあることであるし、新しい研究分野の発展に結びつくことは、よく経験することである。生命科学の分野で、最も美しい実験の1つと言われる、メーセルソンとシュタールのDNAの半保存複製のメカニズムを証明した実験は、超遠心機を使って、行われたものである。スウェーデン人によってなされた実用性や応用性に富んだ発明発見が、国民性によるのか、教育によるのか、研究風土　伝統によるのか興味ある問題である。

現実の問題に、真正面から取り組んで、論理的に解決して、実行するこのスウェーデン流の現実主義は、何も科学技術の問題に限らないような気がする。1990 年代始めに、スウェーデンを襲った金融危機に、国家財政が破綻に追い込まれそうになったときに、与野党が迅速に協力して、思い切った歳出削減と増税を行い、高負担高福祉の政策に舵を切り、財政を立て直し、1990 年代末には財政を黒字にしたと言われている。また、1970 年頃まで、議会は二院制で、社会民主党が一党優位を築いていた。しかし、これが崩れて、下院では過半数に満たないことが多く、いわゆる、ねじれ国会になって、政治が進まない事が頻繁に起こり、これが二院制による議院内閣制の弊害と考えられるように

なった。このために、1971 年から定数 350 の一院制議会となった。しかし、1973 年の選挙で、与野党陣営の数が同数の 175 になると、しばしば、政策がくじ引きで決められると言う異常事態が起きてしまい、これを改善するために、1976 年に議員定数が現在の 349 に改められたという。合理性もここまでくると微笑を禁じ得ないが、不合理性が認識されてから、対策を確実に実行に移す速度と改革の成果を、確実に積み上げていく堅実さは、素晴らしいと思う。スウェーデンには、我々が学ぶべきものが沢山あるように思われる（JSPS ストックホルム研究連絡センター長）。

II. ニュース

KVA-JSPS セミナー

JSPS ストックホルム研究連絡センターでは、2009 年度からスウェーデン王立科学アカデミー（KVA）との共催により、当地で関心が高い研究業績を有する日本の研究者の講演会を企画・開催している。2012 年 1 月 24 日から 26 日にかけて東京大学社会科学研究所の石田浩教授をストックホルム大学に招へいし、「比較可能な社会の階層化」をテーマに本年度第 3 回目の講演会を開催した。26 日には同大学社会学部において「Japanese Youth in Transition」と題し、就活や婚活などの話も交えながら現代日本の若者の就職や結婚に対する傾向についての講義が行われた。スウェーデンでは馴染みの薄い、就活や婚活などの日本独特の社会現象の紹介もあり、日本への関心がある学生や研究者から講義終了後も様々な質問が寄せられた。

スウェーデン同窓会ボードメンバーミーティングについて

2012 年 2 月 16 日に、カロリンスカ医科大学内会議室において、スウェーデン同窓会ボードメンバーミーティングが開催され、ボードメンバーの交代や来年度の同窓会活動計画について議論が行われた。2012 年 9 月に当センターおよび日本大使館、KVA の協力により開催予定である在瑞日本人研究者･同窓会メンバーを初めとする JSPS 事業経験者･国費留学生等の交流促進のための会合について、同窓会活動の一環として同時に総会を開催することや、同窓会主催のセミナーの開催方法の検討など、今後の精力的な活動に繋がる議論が行われた。

カロリンスカ医科大学との会合について

2012 年 2 月 6 日において､カロリンスカ医科大学の Marie Johannesson 国際部長他 2 名と当センター職員､在スウェーデン日本国大使館の松本英登一等書記官とで会合を行った。藤井センター長より、各フェローシッププログラム、セミナーおよびコロキウムなどの当センターの活動内容を紹介し、Marie Johannesson 国際部長からは、日本との交流の新しい TOPIC として、2012 年よりカロリンスカ医科大学・慶應義塾大学・北京大学の 3 校共同で博士課程学生を対象としたサマースクールを開講するとの情報提供があった。また今後、カロリンスカ医科大学に訪問する日本人研究者について、ストックホルムセンターにご紹介いただけることとなった。

慶應義塾大学安井正人教授の来会について

2012 年 2 月 7 日に、慶応義塾大学医学部　安井正人教授に来会された。今回の来瑞は、2012 年よりカロリンスカ医科大学・慶應義塾大学医学部・北京大学医学部の 3 校共同で実施予定のサマープログラムについてカロリンスカ医科大学側との打ち合わせを行うためであり、2012 年・東京、2013 年・ストックホルム、2014 年・北京で開催される予定など、当プログラムについてご紹介いただいた。当センターからは 2013 年にストックホルムで実施する際に、JSPS のフェローシップの紹介を参加学生に行いたいことや、同行教員によるコロキウム実施などの提案を行い、今後も連携し検討していくこととした。

VINNOVA との会合について

2012 年 2 月 10 日に、スウェーデンイノベーションシステム開発庁（VINNOVA）と当センターの会合を行った。

VINNOVA 側からは、Joakim Appelquist 氏(Director Head of International Collaboration & Networks)より、2010 年春に当機関の新戦略事業として発足した「CHALLENGE-DRIVEN INNOVATION」についての説明があった。当プログラムは、スウェーデンの社会および産業界が現在直面している国際的課題を解決し得る研究内容を重点的に支援するもので、2011 年は 635 件の申請の中から 94 件が採択され、計 6800 万 SEK（約 8.2 億円）が支援された。

当センターからは、5 月の「日スウェーデン科学技術合同委員会」において浅島理事が講演予定であることや、9 月には日本大使館および当センターが共同で両国の研究者のネットワーク形成のための会合を予定していることを紹介し、今後もこのような会合を継続していくこととした。

参考：

CHALLENGE-DRIVEN INNOVATION

http://www.vinnova.se/upload/EPiStorePDF/vi-11-07.pdf

CHALLENGE-DRIVEN INNOVATION の採択に関するプレスリリース（スウェーデン語）

http://www.vinnova.se/sv/Aktuellt--publicerat/Pressmeddelanden/2011/2011-10-21-VINNOVA-finansierar-94-projekt-med-68-miljoner-kronor-/

日本学術会議若手アカデミー副委員長の来会について

2012 年 2 月 21 日に、日本学術会議若手アカデミー副委員長である東京大学医学系研究科　狩野光伸講師が来会された。日本学術会議若手アカデミーは、30 歳～45 歳の若手研究者からなり、若手科学者の視点からの科学関連政策への提言、産官学の連携推進、若手科学者への意見収集と問題提起、各国若手アカデミーとの連携等の活動を行っている。今回の来瑞はスウェーデン王立科学アカデミー（KVA）内に設置されているスウェーデン若手科学アカデミーとの意見交換のためであり、日本における今までの活動等について紹介があった。

当センターも、両アカデミーが連携して行事等を行う際には協力したい旨を伝え、今後とも双方で連絡を取り合っていくことを確認した。

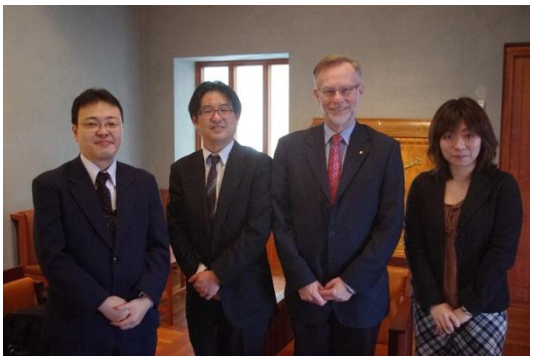
Prof. Görran Hansson ノーベル委員会医学生理学賞事務局長との会談について

2 月 23 日に、一橋大学イノベーション研究センターの赤池教授が「国の科学技術政策と研究者活動との関係性の解明」のためのケーススタディとして、ノーベル賞の仕組みや選考プロセル等について、ノーベル委員会医学生理学賞事務局長 Prof. Görran Hansson に調査を行い、JSPS 職員もこれに同席した。

Prof. Görran Hansson 氏より、医学生理学賞の選考プロセスについて説明が行われ、日本側から近年の環境科学など研究分野の拡大についてのノーベル賞側の対応について質問したところ、新たな賞をノーベル賞に加えるのではなく、各賞の中で、学際的な新たな分野を開拓していくことが重要であるとのご意見であった。

また、公的な研究支援に対する方策についての意見を求めたところ、研究者個人の創造性を高めるような支援、特に若手研究者への支援が重要とのご見解を示していた。

最後に、JSPS では Hope Meeting を開催していることを紹介し、日本の若手研究者に対し、「魅力的な分野にようこそ。前途のある若者に頑張ってほしい」というメッセージをいただいた。



大阪大学島田昌一教授の来会について

2012 年 2 月 23 日に、大阪大学大学院医学研究科　島田昌一教授等が来会された。大阪大学大学院医学系研究科では 2012 年度より「生体統御ネットワーク医学教育プログラム」が JSPS 博士課程教育リーディングプログラムに採択となり、大学院生の受入および派遣先候補であるカロリンスカ医科大学に対し、同プログラムの内容説明および両大学間の MoU 見直しなどの打ち合わせを同大国際担当部署行った旨、報告があった。当センターからはスウェーデンにおける大学間および研究者間交流の現状等について説明を行った。

長崎大学須齋理事の来会について

2012 年 3 月 2 日に、長崎大学　須齋　国際担当理事が来会された。長崎大学において感染症研究の一環としてBSL-4 施設の建設を検討されており、この度カロリンスカ医科大学内のスウェーデン感染症予防研究所（SMI）を訪問し、設置のための周辺への説明や施設運営の現状、長崎大学の研修生受入依頼などについて議論を行われたとの説明を受けた。

また、今回のスウェーデン訪問を機に今後スウェーデンの大学との連携、学生交流について検討していきたいとのお話があり、当センターからも関係者を紹介することなど、今後も協力することを確認した。

ストックホルム大学池上教授の来会について

2012 年 3 月 7 日に、ストックホルム大学の池上雅子教授が来会された。日瑞間の共同研究を支援するためのプログラムとして、二国間交流事業、研究拠点形成事業、外国人著名研究者招へい事業、戦略的国際科学技術協力推進事業（JST）などを紹介した。また、今後、両国間の学生等の交流を活発にするため、日本からの大学関係者の来会時には池上教授をご紹介するなど、今後も連携体制を行うことを確認した。

カロリンスカ医科大学金子明教授の来会について

2012 年 3 月 12 日に、2008 年の「マラリアの多様性と戦略」のコロキウムにおいてオーガナイザーを務めていただいたカロリンスカ医科大学の金子明教授が来会された。マラリアへの対応は国連ミレニアム計画でも最優先課題とされているが、長年に渡り有効な対策が模索されてきたが、未だワクチンの開発には至っておらず、アフリカでは感染し多くの方が命を落すなど、国の発展を妨げる要因にもなっている現状をご説明いただいた。前回のコロキウム実施から研究分野にも進捗が見られることから、将来的なセミナー開催について検討していくこととした。

北海道大学川野辺国際本部副本部長の来会について

2012 年 3 月 22 日に、北海道大学　川野辺国際本部副本部長が来会され、本年 4 月にフィンランド・ヘルシンキ大学内に開設される北海道大学ヘルシンキオフィスについての説明と、6 月 1 日の開所式への出席依頼があった。今後、北欧３カ国（フィンランド、スウェーデン、ノルウェー）における同大学出身者等の追跡調査を行う際に当センターも JSPS 外国人特別研究員事業や国費外国人留学生についての情報収集に協力すること、スウェーデン・フィンランド同窓会との連係を図って行くこと、将来的にフィンランドでシンポジウムを開催することなど、今後の連係を強化させるための議論を行った。

在スウェーデン日本大使館主催東日本大震災追悼・復興レセプション

東日本大震災 1 周年追悼式が、3 月 14 日午後 6 時 30 分から 8 時 30 分まで、在スウェーデン日本大使公邸で開かれ、渡邉大使、日本人関係者及びスウェーデン人関係者、約 150 名が参集した。渡邉大使は犠牲者に対し追悼の意を示し、参加者と共に 1 分間、黙祷が捧げられた。さらに、災害によせられたスウェーデン政府、スウェーデン人関係者および在スウェーデン日本人関係者からの物心両面における暖かい援助に対する感謝の言葉があり、絆と信頼の大切さを述べられた。続いて、ストックホルム王立音楽大学の Staffan Scheja 教授による Franz Schubert のソナタ B-flat Major からアンダンテの演奏があった。

参加者の懇談の後、在ストックホルム日本人の女性コーラスグループ　“さくら”による唱歌“ふるさと”の合唱があり、最後に再び、参加者全員が“ふるさと”を合唱して、追悼式が終了した。懇談の間に、会場の一隅で、災害や復興の様子を伝えるビデオが流され、参加者はそれぞれの思いで観ていた。

Ⅲ. レポート

KVA-JSPS セミナー
ストックホルム大学での講演

石田　浩

ストックホルム大学社会調査研究所のロバート・エリクソン教授とヤン・ヨンソン教授のご推薦により、KVA-JSPS セミナーをストックホルム大学で開催させていただくことができた。大変名誉なことである。私の専門は社会学で、最近よく耳にする格差や社会的な不平等、階層を研究テーマとしている。社会調査研究所では、”Comparative Social Mobility: Japan and Late-Industrializing Nations”というテーマで、社会学部人口学セミナーシリーズでは“Japanese Youth in Transition”というタイトルで講演させていただいた。いずれのセミナーでも、多くの質問とともに活発に議論をかわすことができ、知的にとても充実した時間を過ごすことができ、改めてこのような機会を与えていただいたことに感謝している。日本のおかれている状況を、他の社会に暮らすひとびとに説明することによって、改めて日本の特徴と共通性が見えてくることがある。国際的な舞台で日本社会を比較の視点から説明していくことは、日本だけでなく他の社会をより深く理解する可能性をひらくことになると常々感じている。

エリクソン教授とヨンソン教授のお 2 人の研究者には、1980 年代半ばにオックスフォード大学にポスドクとして留学していた時に、はじめて知り合った。特にヨンソン教授は同年代の研究者として、オックスフォードのカレッジ滞在中には、公私にわたりお付き合いすることができた。その後も研究だけでなく、プライベートな面でも親しくさせていただいている。ほぼ同じ頃に結婚し、家を構え、男の子が２人生まれ、教授のポストに昇進したこともあり、ライフステージを同じくすることによって共有できるところがとても多い。唯一彼は離婚して新たなパートナーを見つけているところは、私にとっては（まだ）未知の世界である。２人の子どもが新しいパートナーの家族と別れたパートナーの家族の間を行き来する生活をみていると、このような選択肢もあるのだな、と実感した。多様な家族の関係を受け入れる寛容性が、現代日本の社会にどの程度あるのだろうか、と考えながら帰路についた。

最後に、JSPS ストックホルム研究連絡センター長の藤井義明先生と副センター長の吉澤菜穂美さんには、滞在中に大変お世話になった。記して感謝したい。

（東京大学社会科学研究所）

職員紹介

はじめまして。４月よりストックホルム研究連絡センターに着任しました、中島麻里と申します。本務先の京都大学では教務の仕事を担当しておりました。海外での勤務は初めてですが、ストックホルムの美しい街並みに感動する毎日です。この１年間国際業務についての見識を深め、北欧諸国の学術情報や当センターのニュース発信に少しでもお役に立てればと思います。１年間どうぞよろしくお願いします（国際協力員　中島麻里）。

Ⅳ. 北欧諸国における学術研究の動向

ストックホルム大学 Wenner-Gren 研究所 Barbara Cannon 教授が王立科学アカデミー会長へ

スウェーデン王立科学アカデミーは、ストックホルム大学 Wenner-Gren 研究所 Barbara Cannon 教授を次期会長に選任したとの発表を行った。任期は、2012 年 7 月 1 日から 3 年間の予定である。会長は、アカデミーの会議等を導く役目を担い、3 人の副会長、常勤の事務総長（Permanent Secretary）とともに、アカデミーの最高会議常任幹部となる。

同氏は、英国生まれで、1989 年に英国市民として同アカデミーの外国人メンバーに選出され、1985 年から 2010 年においてはストックホルム大学 Wenner-Gren 研究所長を、2009 年から 2011 年においてはノーベル財団評議会の議長を歴任されていた。

（参考）
王立科学アカデミー
http://www.kva.se/en/pressroom/Press-releases-2012/Barbara-Cannon-elected-as-new-President-of-the-Royal-Swedish-Academy-of-Sciences/

QS 学生都市ランキング

クアクアレリ・シモンズ（QS）は、大学生にとって最も好ましい都市のランキングシステムとして、QS 学生都市ランキングを 2 月 15 日に発表した。これは、国際的に評価された大学の質や数、学費などの安さや学生生活の質、雇用者側からの大学に対する評価などの 12 項目の基準に基づき、評価されたものである。上位 3 都市は、パリ（1 位）、ロンドン（2 位）、ボストン（3 位）で、上位 50 位以内の北欧諸国の都市は、ストックホルム（27 位）、ヘルシンキ（33 位）、コペンハーゲン（39 位）となっている。

ストックホルムの評価は、市内の 4 大学である、ストックホルム大学、王立科学大学、カロリンスカ医科大学、ストックホルム商科大学を対象としており、地元企業の 67%がストックホルム市内の大学は優良学生を輩出しているなどの高評価が示されていた。

（参考）
QS 学生都市ランキング
http://www.topuniversities.com/student-life/best-student-cities/2012

カロリンスカ医科大学内学生交流スペースのリニューアル

2012 年 2 月 24 日にカロリンスカ医科大学 Solna キャンパス内の学生交流スペースがリニューアルオープンした。カロリンスカ医科大学の、学生の学習環境を改善するための Future Learning Environments project がデザイン等を手掛けており、家にいるような空間を作ることを目指して 2011 年 12 月から改修が行われていた。このプロジェクトにはカロリンスカ医科大学の学生も関わっている。

暗かった談話スペースは、白い壁と天井に変わり新しい照明が設置され、色とりどりの家具で整えられ、明るい空間へと変わった。

Solna キャンパスでのリニューアルはパイロットプロジェクトであり、同様のプロジェクトが今後 Huddinge キャンパスでも行われる予定である。

学生たちはグループワークや自習など交流の場として使用している。

（参考）
カロリンスカ医科大学 HP
http://ki.se/ki/jsp/polopoly.jsp?l=en&d=41857&a=138807

スウェーデンからの留学人口の増加と学生の動向について

3 月 29 日、高等教育庁より昨年度のスウェーデンからの留学生についての発表があった。昨年度 26600 人のスウェーデン人が留学し、過去 10 年間で最多数を記録した。留学先として最も人気のある国は英国と米国であったが、アジアへの留学がますます注目されていることが明らかとなった。

スウェーデンからの留学生のうち約 3 分の 2 が留学先にヨーロッパを選んでおり特に英国、デンマーク等への留学者が多い。一方で、オーストラリアへの留学者は 10 年前と比べると約 30%減少し、スペインとフランスへの留学者は 2000 年代初めに比べて約半分となっている。またこの 5 年間でアジアへ留学する学生は約 60%増加するなど、学生の動向についての変化も見られた。

スウェーデンからの留学者の多い国上位は、1 位英国、2 位米国、3 位デンマークと続き、アジアの国では、10 位中国、11 位日本となっている。

（参考）
高等教育庁 HP（スウェーデン語）
http://www.hsv.se/publikationerarkiv/pressmeddelanden/2012/alltflervaljerutlandsstudier.5.79301179136356a75158000534.html

林崎良英理化学研究所オミックス基盤研究領域長がカロリンスカ医科大学より Honorary Doctor of Medicine を受賞

カロリンスカ医科大学の 2012 年の名誉博士号受賞者が発表され、林崎良英理化学研究所オミックス基盤研究領域長他 2 名が Honorary Doctor of Medicine を受賞することとなった。カロリンスカ医科大学は毎年、当大学への多大な貢献をした人に、名誉博士号を授与している。

林崎領域長は世界の RNA 研究の発展に多大な貢献をし、国際研究コンソーシアム「FANTOM」プロジェクトの発案者として広く知られている。このプロジェクトの早期段階からカロリンスカ医科大学の研究者らとも協力し、当大学の業績への多大な貢献が評価されての受賞となった。

授賞式は 5 月 25 日にストックホルム市庁舎で行われる。

（参考）
カロリンスカ医科大学 HP（スウェーデン語）
http://ki.se/ki/jsp/polopoly.jsp?d=130&a=138700&l=sv&newsdep=130

北海道大学ヘルシンキオフィス開所について

北海道大学は、2012 年 4 月 1 日に「欧州諸国における研究交流への支援、日本人留学生の拡大・支援、外国人留学生の獲得」を目的とする北海道大学ヘルシンキオフィスを開設し、初代所長に北海道大学スラブ研究センターの田畑伸一郎教授が着任された。

6 月 1 日にヘルシンキ大学内講堂において、開所式および記念シンポジウム「Japanese Pop Culture: A Window on Japan」を開催する予定。

住所： Fabianinkatu 26, 00100 Helsinki, Finland
E-mail: helsinki_office@oia.hokudai.ac.jp

2012 年ノーベル賞の発表日程について

ノーベル財団は、2012 年のノーベル賞各賞の発表日を公表した。各賞の発表日時は以下のとおり（いずれもスウェーデン現地時間）。

生理学・医学賞	10 月 8 日（月）11:30
物理学賞	10 月 9 日（火）11:45
化学賞	10 月 10 日（水）11:45
平和賞	10 月 12 日（金）11:00
経済学賞	10 月 15 日（月）13:00
文学賞	（慣例に従い、後から公表される）

（参考）
ノーベル財団 HP
http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/about/prize_announcements/

Ⅴ. お知らせ

セミナー/シンポジウムの開催

JSPS ストックホルム研究連絡センターでは下記の通りセミナー/シンポジウムを開催します。
参加は無料ですので、興味のある方はふるってご参加ください。
お問い合わせは当センター（info@jsps-sto.com）までご連絡ください。

日-スウェーデン科学技術合同委員会サイドイベント

日時：2012 年 5 月 11 日（金）13:45～
場所：カロリンスカ医科大学, Main Lecture Hall, Dept. of Physiology & Pharmacology
タイトル：Recent Ternd in Japanese Science / Stems-sell Research -Present and Future-
講演者：浅島　誠（日本学術振興会理事）

日-ノルウェーシンポジウム

日時：2012 年 6 月 5 日（火）－6 日（水）
場所：オスロ大学
テーマ：Space Sciences in Polar Region
主催：名古屋大学、オスロ大学、ノルウェーリサーチカウンシル、日本学術振興会

表紙の写真

ヴァルプルギスの夜

4 月 30 日の夜、スウェーデンのあちこちで「ヴァルプルギスの夜」という祭が開かれます。大きな焚火と歌で春の到来を祝う祭で、中欧や北欧諸国においてクリスマス、夏至に続く大切な行事として親しまれています。

ヘルシンキ大聖堂

1830 年～1852 年に建築され、上から見るとほぼ聖十字の形をしているヘルシンキ大聖堂は、フィンランドの首都ヘルシンキのほぼ中央に位置する。キリスト教ルーテル派の総本山であり、教会の役割の他に国会の開会式やヘルシンキ大学の学位授与式、コンサートにも使用される市民の象徴であり、今日最も有名な観光名所となっています。

「白夜の国々 春夏秋冬」　ニュースレター　第３４号
編　集：中島　麻里
発行日：2012 年5月8日
発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター
連絡先：JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171-65 Solna, Sweden　Phone: +46 (0) 8 5248 4561　FAX: +46 (0)8 31 38 86
Website: http://www.jsps-sto.com/　E-mail: info@jsps-sto.com